

反障害通信

22. 11. 18

125号

そもそも 左翼——保守——右翼——ファシズムとは何だろう？

最近、テレビや新聞や雑誌を見ていて、保守と右翼(右派)という言葉の規定をどうしているのだろうと、疑問に思うことか度々出てきています。そこで、そのことをもっと広げて、そしてこの間わたしがやってきたファシズム論とも絡めて、わたしなりのとらえ返しの試みをおきたいと思います。なお読書メモのファシズム研究とも連動させています。

従来の「左翼——保守——右翼——ファシズム」規定

従来の「左翼——保守——右翼——ファシズム」規定は、歴史の歯車を前に進めようとするのが左翼、逆向きに回転させようとするのが右翼、保守は現状の体制を守ろうとする、という内容でした。でも、この規定ではファシズムをどう位置づけるのかができません。ファシズムは資本主義の行き詰まりの中で出てくるので、それは歴史の歯車を前に回すことではないし、そうかと言って逆向きに回すことでもないからです。また、今日新自由主義という事が出てきていますが、それは「後期資本主義」に起きてくることですが、歴史の歯車を前に進めるのではなく、初期資本主義以来矛盾を緩和させるために同時に進めてきた福祉を後退させる内容になっています。

このような規定の矛盾は、そもそも資本主義社会の分析の基礎をなしたのはマルクス派の理論で、マルクスがとらわれていた進歩史観なり発達史観というところの問題性としてとらえられます。晩期のマルクスが、古代社会研究やアジア的生産様式の発見のなかで、単線的発達史観のようなことを見直そうとしていたことにそれは通じています。

では、どうするのか？

わたしの反差別の立場からの「左翼——保守——右翼——ファシズム」規定

わたしは反差別論をやっています。その立場から、この問題を解いてみます。左翼は差別をなくす方向で運動を進めるひとたち。保守は前項の従来的な意味でいろんな保守がいるのですが、反差別ということ言えば、資本主義社会はその矛盾を緩和するために人権論を突き出していて、その人権ということを守らなきゃいけないとしているひとたち。右翼は差別的なひとたち。ファシストは差別主義者、となります。これは極右と規定もできます。

さて、問題は「左翼は差別なき社会を目指す」と言っても、現実にはその差別をとらえきれなかった歴史があります。また覇権主義国家や国家主義という差別にとらわれて来た歴史もあるのです。だから、そもそも過去の運動を反差別というところからとらえ返し、改めて出発点に立つ必要があるのです。

ポピュリズムとファシズム

さて、もうひとつ混乱的概念があります。「ポピュリズム」ということです。ポピュリズムをあえて日本語に訳すると「大衆迎合主義」となるのでしょうか？ ポピュリズムというの

は、権力掌握願望の中で、そもそも何をしようとしているのか分からない行動をとるのです。有名なのはトランプ前アメリカ大統領の右派ポピュリズムです。民衆のなかにある差別意識に乗っかり、排外主義的自国第一主義(自国ファースト)自分ファーストの行動をとるのです。大阪維新が県職員や市職員、その組合をターゲットにして攻撃し、人気取りで支持を広げていった行動も、この類いです。これはナチのユダヤ人差別と反共産主義の攻撃で支持層を広げていった行動と類似していますが、これは何をしようとしているのかはっきりしているところのファシズムと何をしようとしているのか分からない人気取りの政治のポピュリズム違いがあります。ちなみに保守ポピュリズムとして権力掌握願望からカメレオンのように自らをあわせていく小沢一郎の政治を押さえることができるのではないかとも思っています。保守ポピュリズムは状況の変化の中で、右派ポピュリズムに転化していくことがあるし、右派ポピュリズムはファシズムの蠢動としておさえられるのではないかと考えています。

日本型ファシズム

さて、日本型ファシズムは、戦前・戦中は天皇制ファシズムとかいう規定もされてきました。天皇制が差別の象徴としてあることは否めません。天皇制ファシズムの元になるイデオロギーは日本神話なるカルト的国家神道なのです。これが継続しつつ、靖国信仰とともに、日本会議などの暗躍があります。また旧約聖書の勝手な改竄から作り上げたカルト宗教の旧統一教会が反共主義というところを旗印にして、カルトファシズム的なことを作ってきたファシズムの蠢動もおさえて置かなくてははいけません。

何が問われているか？——過去の運動の総括の中から社会変革(左派)運動の定立を！

今、日本の政治は小選挙区制度という民意を反映しない制度下で、二大保守による政権交替可能性という政治で、保守政治に飲み込まれ、左翼が革新というあいまいな概念で飲み込まれ、さらにその革新が弱体化していく政治になっています。そして、右派が改革を掲げ、革新やリベラルは守旧派的になっていっています。

いまこそ、社会を変えるんだ、変え得るんだという展望を示していく必要があります。そのためには、過去の運動の総括と理論的整理をきちんとしながら、とりわけファシズム的な蠢動をきちんと批判をしながら、運動をすすめていかなくてははいけません。わたしとしては反差別というところから、過去の運動のとらえ返しや総括をなしつつ、理論的整理をしていきたいと考えています。

「社会変革への途」を中断していましたが、改めて構成を練り直し、書き進めていきたいと思っています。

自分の書いている文書は自分で客観的に見れません。読者のみなさんの批判・対話をと願っています。

(み)

(「反差別原論」への断章) (54) としても)

読書メモ

今回は一連のファシズム研究、日本の植民地支配の中でおきた 731 部隊の人体実験を扱った『悪魔の飽食』、ヒトラーの『わが闘争』、そして日本に於けるファシズムの蠢動としての維新政治の批判の本。巻頭言と連動させました。

たわしの読書メモ・・ブログ 604

- ・森村誠一『新版 悪魔の飽食—日本細菌戦部隊の恐怖の実像!』角川書店(角川文庫) 1983
『悪魔の飽食—第七三一部隊の戦慄の全貌! (続)』角川書店(角川文庫)1983
『悪魔の飽食 (第3部)』角川書店(角川文庫)1985

この本になった原稿は、『赤旗』の連載から始まったようで、写真の誤用問題で批判が起き、歴史修正主義者などによって731部隊そのものがなかったかのような批判にまで至ったのですが、角川文庫版で新版として校正したものを出すに至っています。

作者はそもそも売れっ子作家で、数々の小説をヒットさせていたのですが、これはノンフィクションとして出したシリーズです。本編(『新版 悪魔の飽食—日本細菌戦部隊の恐怖の実像!』)で輪郭を描き、「続」(『悪魔の飽食—第七三一部隊の戦慄の全貌! (続)』)で戦後の動きとアメリカとの裏取引を書き、第3部で被害者側の中国での取材旅行を書いています。

日本が侵略と植民地支配の中で、数々の悪行をなしていたのですが、その極ともいえること。マルタ(丸太)と呼称した中国人・ロシア人捕虜や中国民間人を細菌兵器などの実験台にした事件です。ナチス・ドイツのアウシュビッツの強制収容所と並び称されるファシズムの悪行として歴史に刻まれています。戦後ドイツはアウシュビッツの強制収容所の反省をしているのですが、日本政府はこの問題にふれていません。そして、これはロシアがハバロフスク裁判で一部戦犯としてとりあげていますが、東京裁判では裏取引で米軍へその実験資料を渡すことで免責され、とりあげられず、731部隊で暗躍したひとたちが、戦後「研究成果」として臆面もなく論文などで発表し、それなりの地位を得ていくという事態さえ起きたのです。戦後医学界・薬学界で数々の医学倫理に反する事件や薬害などが起きるのは、戦前・戦中の731部隊を始めとする医学の途を外れることの反省がなかったからだとの指摘もされています。

さて、大きな問題になった「続」での写真誤用問題です。第3部での巻末にこのいきさつが書かれています。これで、歴史修正主義者を始めとする植民地支配や戦争責任を軽視する、ないがしろにするひとたちから様々な攻撃をうけることになりました。このようなことは、「従軍慰安婦問題」や南京虐殺の問題でも起きています。そもそも歴史的事実の検証ということのむずかしさの問題があります。加害は小さく見せようとか被害は大きく見せようという心理が働くところに、証言者の注目を浴びたいとか、謝礼を求めての言動などもおきる場合があります。そういう歴史の検証のむずかしさの上で、歴史的事実の隠蔽とか、そもそもなかったことにする策動という歴史修正主義さえ起きてきます。

またトランプ前大統領のような政治的意図をもって、「フェイクというフェイク」という意図的操作さえ起きます。結局、総体的・相対的とらえ返しとして事実関係を検証していくしかありません。そもそも、どのような立場で、歴史を検証しようとしているのかの立

場性の問題があるのです。「第3部」の中国取材旅行では、「万人抗」での三光作戦（殺しつくす、焼きつくす、奪いつくす）についてもふれています 226-35P。過去の戦争や植民地支配の歴史をどういうところでとらえ返そうとするのか？ それについて、著者が現地で提起されたことばがあります。「前事不忘、后事之師」——「前の経験を忘れず、後の戒めとするという意味」160P。これが著者の反戦というところでの思いと共鳴したようです。

さて、この著者の戦争や植民地支配に反対し、その中で起きた悪業を告発していく姿勢に共鳴しているのですが、いくつかおやっと思ふことがありました。著書自身が時代制約性とその中でも個の主体性を問題にしているのであえて書くのですが性差別、障害差別的（「狂気」）などの差別の問題での総体的とらえ返しがなされているとは言い難く、愛国心などを否定し切れていないなど、国家主義批判も貫かれていないということもあります。

最後に、この本を一連のファシズム論の論考の中で読んでいて、日本型ファシズムの成立モーメントのような事が、第3部の最終章の記述の中で浮かび上がってきました。天皇制、単一民族（という神話）・集団主義、民衆の反抗の歴史のなさ 260P、このあたりもう少しまとめてみようと思っています。

たわしの読書メモ・・ブログ 605

・アドルフ・ヒトラー／平野一郎・将積茂訳『わが闘争(上)—民族主義的世界観』『わが闘争(下)—国家社会主義運動』角川書店(角川文庫) 1973

この本は間違えてもお勧め本ではありません。以前、歴史修正主義者たちが作った教科書『新しい歴史教科書』がかなり売れたと宣伝していたのですが、それは批判のために読んで置かなくてはと買ったひとがかなりいたからです。この本もアーレントがその著のなかで、何カ所も取り上げています。いわば、ヒトラー——ナチズムを知る上で最も学びやすい著作です。

わたしはこの間ファシズム論を書こうと試みて来て、試行錯誤のなかで、なんとか中間的試論のようなことを得ています。それはファシズムと言っても、いろんなバリエーションがあり、しかもありつつも、共通の概念があるということです。共通の概念というのは、まず競争原理で強者が弱者を支配する原理、したがって、ウルトラ優生思想があり、そして全体主義的に個が全体に従う、ということを目指すということです。そして、何らかの差別事項(よくあるのが障害差別や人種・民族差別など)での排除の論理の中で、全体主義的統一へ強力な意志を働かせるということです。

さて、ここでヒトラーがこの著作の中で突き出しているのは、人種を自然とした生物学的決定論(まさにマルクスのいう物象化)、別の言葉で表すとウルトラ優生思想とも言いえることです。生存競争原理による一者(優越者)による支配という民主主義の否定で、議会主義批判を繰り返しています。

ファシズムによくありがちな、民族主義や国家主義は一見回避しようという姿勢があります。たとえば、民族という概念は言語の同一性というところまで、誰もが言語を身につけようということであいまいになるので、回避しようとしているのですが、ウルトラ民族主義としての人種差別主義をユダヤ人差別を軸にして突き出しています。それは陰謀

論的なところで、何でもユダヤ人差別に結びつける論理を振りかざしています。そして、それをアーリア人種の純血というところでウルトラ人種差別主義的に突き出しています。どうも分からないのは、アーリア人種という概念を突き出すのは、論理的に考えると余計曖昧になるのですが、そもそもナチズムは感情に訴える宣伝の党で、逆にあいまいながゆえに押し通すとしているのかもしれませんが。

国家主義に関しては、そもそも強者が弱者を飲み込むこととしての侵略を正当化して、第三帝國的なところを突き出していて、国家は手段に過ぎないとしている、むしろウルトラ国家主義とも言いえることです。

ナチズムの台頭は第一次世界大戦でその賠償を負うところで、精算と憎しみと武力によるリベンジということを煽り党勢を拡大していったのです。また、ロシアにおけるボリシェビキ革命に対し、ペストになぞらえて恐怖心をあおり、反共産主義(反ボリシェビキ)ということも、大きなテーマとして突き出して、東方ロシアへの拡大とフランスへの対抗意識・リベンジなども含めて、煽っていくという情勢の中でのナチズムの台頭です。

いつもの切り抜きは、総てに批判のコメントをつけなくてはいけなくなるので、備忘録的なメモに留めます。

(上)

国家の論理を経済よりも優先させる 203P

全体主義 204P

マルクシズム——ベスト 206P

国家社会主義 民族と祖国 278P

議会主義批判 311P

血と人種に対する罪 323P→T4 計画 332P

支配による平和主義 375P

より強い者が勝利する——生存競争原理 376P

民族の文化——創造、支持、破壊 377P

全体社会 387P

意志の力 432P

意志と力 439P

民衆蔑視 439P

民族主義という概念の回避 469P

(下)

ゲルマン化と混血の否定 31P——人種主義

国家は目的のための手段 36P

少数者による支配 44P

ただ一人の勝利者 188P

国民の防衛で国家の防衛ではない 211P

労働組合の必要を説くも方針が出せない 資本と労働者の関係が押さえられていない——空論 284P 資本の活動に任せる、宗教も既成の二つに任せる 神の否定はない

マルクシズム批判として 自然の本能(自己保存能力)340P-----競争原理と自然淘汰とい

たわしの読書メモ・・ブログ 606

・富田宏治『維新政治の本質 組織化されたポピュリズムの虚像と実像』あけび書房 2022

この本は、書店の棚で見つけたもの、維新の分析をしようとしていたところで、参考に買い求め読みました。その著者の維新批判は、わたしもだいたい共鳴できる内容です。

この本は、過去にいろんところで発表した文書をまとめたもので、かなり重複した文もあり、重複していることからいくつかのキーワードのようなことが浮かび上がってきます。キーワードを拾い上げながら、この本との対話の中で、わたしなりに維新政治のとらえ返しを深化させてみます。

著者は維新の選挙や二度にわたる大阪市を廃止する住民投票の分析をかなり緻密にやっています。大学の教員ですが、運動的な観点があるひとのようで、中央政治では野党共闘、大阪では反維新の立場をはっきりさせています。そして、「不寛容なポピュリズム」維新対「寛容とリスペクトのオール大阪」という対立図式を突き出し、維新政治の中で、気づきと目覚めの4項目「①改めて明らかとなった人の命の大切さ人間の尊厳・個人の尊厳、②感染拡大が露にした貧困と格差、そして医療態勢と公衆衛生の脆弱性をもたらした新自由主義の問題性、③人類共同の闘いに分断を持ちこみ、医療充実や貧困解消に向けるべき資源を軍事費に浪費する自国第一主義や大国の愚かさ、④科学的なエビデンスに基づく説明責任を果たし得ない政府を戴くことの不幸」157P というようなことも書いています。

橋下徹元大阪知事・元大阪市長の言った「ふんわりとした民意」(に乗る)すなわちポピュリズムということと「組織化されたモンスター集票マシン」なり「組織化されたポピュリズム」という一見矛盾するような並立があるのですが、それはナチが情報戦に長けていたというところでとらえ返しをしていくと矛盾しないのです。

橋下徹元大阪知事・元大阪市長がテレビに出て、「ファシズムとかナチとかいう規定をするのは、ヨーロッパでは人格を否定する内容がある、そのような規定には慎重であるべきだ」というような趣旨の発言をしていました。このような発言をしているということは、逆にいうと、ファシストやナチという批判が維新批判に有効だ、ということです。勿論、単なるレッテル貼りではなくて、きちんとファシズムやナチズムの規定をした上で(今号巻頭言でわたしの規定)、批判していくことが必要なのです。

この本の冒頭の「自業自得の人工透析患者なんて、全員実費負担にさせよ！ 無理だと泣くならそのまま殺せ！ 今のシステムは日本を亡ぼすだけだ!!」3P 長谷川豊発言(こういう発言をしたのに、維新が千葉一区と比例南関東ブロックで公認)は、まさにヒトラーが進めた T4 計画や相模原やまゆり「障害者」殺傷事件や「反延命主義」の中で起きた死へ誘う福生病院透析中止事件などと同等の根をもつこととして、候補や維新に批判をぶつけていくことなのです。

さて、著者はファシズムという観点からのとらえ返しがありません。ですから、ファシズムと保守の区別が出来ません。これは保守ということで、保守も右翼も一緒くたにしていくこととなります。

社会学者の宮台慎司(?真司)さんの「経済保守——政治保守——社会保守」という分類を援用しようとしているのですが、意味が分からなくなっています。そもそも、「資本主義社会では乗り越え不可能な思想」(サルトル、デリダの提言)と規定されたマルクスは「国家と市民社会の分離」という規定をだしていたのですが、そもそもこれ自体が批判の対象になっています。まして、今日の政治は経済にも社会にも介入していく、規定していく政治です。

さて、ファシズム規定の混乱は、右翼と保守とファシズムの関係を押さえられないところから来ているのではないかと考えています。すでにそのあたりの分析をしたひとがいるのかもしれませんが、不勉強なわたしは押さええていません。わたしなりに試論を出してみます。

かつては右翼を歴史の歯車を逆に回そうとしているひとたち、保守の現行の体制を守ろうとしているひとたち、左翼を歴史の歯車を前向きに回そうとしているひとたちと言う規定をしていました。それは、マルクス派もいわゆる進歩史観や発達史観というところで同調していたというか、むしろマルクス派の規定が採用されていたのでしょうが、そもそも晩年のマルクス自身が、単線的発達史観のようなことの見直しのようなことを展開しようとしていました。

そして、ファシズムや新自由主義ということが、そもそも資本のなすがままにまかせるという意味での資本主義の後から出てきていて、それがまさに右翼や極右と規定されることから、歴史の歯車を逆向きに回すという規定が出来なくなるのです。ファシズム的な動きや新自由主義が改革という名の下に行われることからそのことが見て取れます。

わたしは反差別論をやっている立場で、差別というところで問題を立てます。右翼は差別的なひとたち、保守は人権というところで人権をまもろうという姿勢が一応あるひとたち、右翼は差別的なひとたち、極右は差別主義者という規定が出来ます。

さて、もうひとつ曖昧な規定は「ポピュリズム」ということ。何をしようとしているのか分からない、権力掌握願望から、民衆蔑視で動くことをポピュリズムと規定するのではないのでしょうか？ 右派ポピュリズムというのは、民衆の差別的意識に依拠して岩盤支持層を作り出し・広げようとするので、まさにトランプ前アメリカ大統領に象徴されるような動き。保守ポピュリズムは小沢一郎の「生活が一番」というようなスローガンで、政権を掌握しようという、何がやりたいのか分からないような動き。ちなみに、左派ポピュリズムという言い方をするひとがいるのですが、左派は何をしようということがはっきりしているから、左派ポピュリズムというのはいりません。ファシズムも何をしようとしているのかはっきりしているので、ポピュリズムではないのです。ただ、ファシズムの蠢動としての右派ポピュリズムをおさえておく必要があります。維新政治はまさにこれなのではないのでしょうか？

さて、この本に話を戻します。この本の7章は「『都構想』よりコロナ対策やろ！」の声を——大阪維新“吉村人気”の虚像と実像」10章は「コロナ禍が暴きだした維新の正体」で、如何に維新改革が福祉を破壊し、人口あたり全国一の死者数を出したかというようなことを書いています。このあたり、もっと詳しい資料を当たり、実際にぶつけて批判していく作業が必要なのだと思います。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 125 号」アップ(22/11/18)
- ◆メインの「反障害——反差別研究会」のホームページ不備・校正があり、かなり大幅な更新をしました。今号の最後に掲載している、「Ⅲ.「会」の当面の研究・執筆課題 (2022.5 全面改定)」を新たに書いています。ホームページ校正したところは、ホームページを見てください。訂正箇所はしばらく赤字にしています。
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も DVD などの他のメディアでの郵送などで対処したいと思っています。横書き版は最後、の連絡先から連絡をお願いします。
- ◆「反差別資料室 C」で、また見れない文書が出ています。とりあえず、タイトルの最後に「反障害通信」の掲載号数を書いていますので、メインホームページの「会報」の当該通信号から見てください。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」を、新しい本の購入や読書に合わせて、一年ぶりにリアップしました。

(編集後記)

- ◆今回は、超短縮版。といってもこの位が丁度いいのかもしれませんが。
ホームページからアクセスされている方は番号がひとつ間違えていると指摘されるかもしれませんが、前号 124 号を非公開にしているためです。しばらくして公開にします。
- ◆本が読めていません。読書メモのストックが底を尽きました。次号をどうするか検討中です。
- ◆今回はファシズム論的なことの続き。右翼と保守とファシズムの関係を考えてみました。読書メモで維新批判本をとりあげ書いてから、巻頭言につなげたのでかなり重複した文になっています。
- ◆読書メモは、ファシズム論で読んでおくべき本として積ん読していた 731 部隊を取り上げた『悪魔の飽食』とヒトラーの『わが闘争』。前者は、なぜ医学をやっているものがこのようなことができるのか、後者はヒトラーのような発想は日本の政治家の中にすでにあるか、その芽のようなことがあるかと思いつきながら読んでいました。
- ◆フクシマが起きたのに、また原発の再稼働や新規増設をもくろむ動きが出ています。戦争が繰り返される歴史や、また過去の反省もなく、戦争の危機を煽り準備を進める、オリンピック汚職が問題になっているのに、またオリンピック誘致を進めようとする、ほんとに歴史から学ぼうとしない政治家やその煽動に乗ってしまうひとたち、きちんと歴史を検証する中で、批判をしていかななくてはと思います。
- ◆もはや自民保守も、保守野党も、右派野党も、ポピュリズム政党もだめです。社会を変えよう、変え得るというところで、民衆運動の只中から議会も動かす政治を模索していかなくてはと考えています。そのためには過去の運動の総括や理論的整理をもなしていかななくてはと、その端っこで担おうとしています。
自分の書いた文の検証が自らなしがたいことがあり、批判をと願っています。

反障害－反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返ししながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害－反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>